

我国英学の伝統について

松 田 福 松

序

英語・英文学の専門誌『英語青年』は本年2月1日号の巻頭に『新英学展望』として、加納秀夫・富原芳彰両氏の『対談』を特集、また総合誌『日本及日本人』も本年の新春号に『新洋学事始—日本の夜明けのために』と題して、西田長男・竹市明弘・多田真鋤・柏原兵三各氏の論説を特集している。『新英学』といい、『新洋学』といい、共にいわゆる1970年代における我国の新しい進路を展望・摸索しようとしているのであって、急流のごとく変転する世界の現勢に棹さず祖国の危機を予感し、これに対応しようとする姿勢を示したものと云い得る。

しかし、『英語青年』の対談は、『英語ないし英語文化をとおしての日本人の国際化』を主題としつつ、結局『英語や英文学の研究という関係』の範囲を出でず、現在の『英学』という語が『英語学』と『英文学』とを一括的に表わす便宜語として用いられていることを示している。そのことは、同誌に毎号載っている『英学消息』の内容が、各地の英語学談話会や英米文学研究会の報道でみたまされているのを見てもわかる。

『新洋学事始』は、さすがに『日本の夜明けのために』と副題されている通り、『衣食住ことごとく充ち足りたエコノミック・アニマルが「生きがい」がないと叫ぶ様な、まさに「精神的餓鬼」である』現代の日本の『故郷喪失』の自覚と、『近い将来に日本がヨーロッパ・アメリカ的近代化をはるかに止揚し

たスーパー近代化の選手となり、超近代化の偉大だが滑稽なモルモットの役割を果すことになりはしないかという懸念』とに立って、『これまでの西洋文化受用の仕方』を反省し、『これからの西洋文化受用の仕方』を求め、『民主主義の虚像と実像』を究めて『日本歴史のいたるところで発現してきた「外面的品位の倫理=恥の文化」に共同体の秩序形成力を求め』る『道義立国のすすめ』を説こうとするのである。そこには、今わが国が直面する危機に対する自覚と、これに対応しようとする警世的発想とは十分に認められるのではあるが、日本歴史に一貫する外国文化受用の特質に対する具体的・文献的・文化史的分析は見られない。立論の材料としている外国文の引用解釈においても、“There are quite a few things we could learn from them to our benefit.” という一外人の日本に対する評語を、『今日、西洋人が日本人より教えられるものは、殆んど何もないといっている』と受取って、“quite a few=a fairly large number” (相当多数) 即ち『今日、西洋人が日本人から学べば西洋人の利益となるべき事柄は、随分沢山ある』と言っているのが全くわからぬ、初歩的誤訳さえ目につくのである。

1. 漢学・蘭学・英学

我国が東亜大陸の文化と直接交渉を持つに至った最初の文献的記録は『古事記』中巻ホムダワケノミコト(応神天皇)の御世に朝鮮半島の百済国王が天皇の命によって賢人ワニキシと『論語』10巻・『千字文』1巻を貢上した記事に見られる。『日本書紀』によれば、天皇の愛子ウヂノワキイラツコは、この王仁(ワニ)に学んで通達せざるなく、天皇紀28年の条には、高麗王の上表の無礼を怒ってその使者を責め、その表を破り給うたとある。また、皇兄オホサザキノミコト(仁徳天皇)をさしおいて皇位を嗣ぐことを固辞し給い、相譲りて皇位空しきこと3年、ついに自らおわり給うに至った。このことは、この皇子が国際間における内外の別、血族間における長幼の序という東洋倫理の骨髓を身を以て体得し実践し給うたことを意味し、そこに既に日本人の外国文化摂取の根本態度が明確に範示せられあるを見るのである。即ち、単なる知識として受取る

のでなく、これを実人生に活用実践し、いのちをかけてつらぬかねばやまぬ生命原理として活かしきろうとするのである。それはやはり、古来の民族精神『やまとだましひ』の発露にほかならぬ。

かくて始った大陸文化の受用は、やがて聖徳太子(574-622)御一生の大業として具現せられ、『群生とともにその苦楽を同じくす』る平等大悲・真俗不二の教化精神による現実的国家経綸として花咲き、後の大化改新・王朝文化の基が開かれた。儒教及び仏教を中核とする大陸思想學術の粹は、太子の御生涯の悲劇的運命に融化せられ、『十七条憲法』と『三経義疏』に日本文化創業の現しきあかしを仰ぐのである。『共にこれ凡夫のみ』の自覚に立って懺悔求道、『やわらぎをもて貴しとなす』団体協力の人道世界顕現の、古今に通じ東西に亘って不易なる天地の公道・人倫の常経を開示し、これを現実国家の内治外交と国民教化の相即に身を以て実践垂範し給うた。

爾来千有余年、東亜大陸には幾多の易姓革命が繰返され、儒教も仏教もほとんどその跡を絶つに至ったが、我国においては、時に時勢の隆汚を重ねつつも、連綿一系の皇統を維持し、東亜文明の偉績も永く国民生活の中に融化宝蔵せられて今日に至っている。文化は交通によって進展するといわれるのであるが、燦爛たる外国文化が強大なる国家威力を背景として襲来する時、それは一国の興廢存亡のわかれる一大転機となり、その国民の資質・道徳力がその極限まで試されることとなる。漢学は、かくて、全人生的の学問として我国に受け容れられ、摂取融化の道をたどった。

国史上第二回の大転機は、戦国末期、天文12年(1543)ヨーロッパ人の来航を以て始まる。ついで同18年にはザビエル師の渡来を見、ここに鉄砲とヤソ教という形で西欧文化との接触が始まったことは、後の事態の進展に対し象徴的の意味がある。以後、慶長6年の禁教、寛永14年の島原の乱を経て、同16年(1639)の鎖国に至る約百年は結局不毛に終って、安永3年(1774)杉田玄白の『解体新書』が世に出るまで百三十余年をけみせねばならなかった。この間、漢学の絶対支配下に国学の興起あり、更にここに蘭学の端緒開かれて幕末より明治維新に達する激動期の疾風怒濤を巻き起す思想的基盤は着々として築かれて行くの

である。

蘭学は蘭方医学より始まり、兵学から天文・地理・物理・化学・植物学等百般の事物に及び、いわゆる実学として先づ受容された。これは鎖国期を通じてオランダが唯一の西欧貿易国であり、且つ実学以外の書は全て禁書とせられた当然の結果であって、黒船の来航(弘化2年—1845)・下田の開国(安政元年—1854)に及んでは、『英・仏・蘭3語に通ずるは国防の要務』とせらるるに至り、蘭学は急速に英学に取って替らるる形勢になった。この蘭学から英学への過渡に立つ代表的人物は福沢諭吉(1835—1901)である。

福沢は始め、天保9年(1838)大阪に開かれた緒方洪庵の適々塾に蘭語を学んだのであるが、この蘭学塾で教頭格にまで進んだ彼が、開港直後の横浜視察の結果、『爾今以後一切万事は英語』と覚って英学に志し、『日本開闢以来はじめての大事業』たる咸臨丸の太平洋乗切りには艦長木村摂津守の従者となって渡米し、『日本にウェブストルという字引の輸入の第一番』となった。元来、福沢は蘭学に入る以前に既に中津藩の経書をもっぱらにする塾に通って『春秋左氏伝』の通読11遍に及ぶまでの漢学の修業を積んでいたのであるからして、彼は正に漢学・蘭学・英学を一身に体現した人と言えよう。

幕末蘭学の精神は、『聖賢の学を以て志と為す』ことを書院学約に掲げた佐久間象山が時事を痛論して時の幕府当局に献じた上書稿に『其頃英国の兵清朝を騒がし候儀も風聞御座候に付、深く皇国の御義を心配』する動機から『夷俗を馭し候には夷情を知り候より先なるはなく、夷情を知り候には夷語に通ずるより要なるはなく』と考へて『清朝の同文韻鑑に倣ひ皇国同文鑑を作り五大洲中の語に通じ申すべく、ただ和蘭は久しく互市御許容の国にて其国の書の渡来も多く、天文・地理・医術・砲兵の学を為し候者も皆先づ和蘭の書を読み候義』とある通り、『防海の要、彼を熟知し候より先なるはなく』という国防の必要から出発したものであって、国学と漢学の融合から菅家遺誠の『和魂漢才』の標語が生れたごとく、更に蘭学を加えて『和魂漢才洋技』の標語を生じ、明治維新の大方策を宣言した五ヶ条の御誓文の最後に『智識を世界に求め、大に皇基を振起すべし』と定められた。これは当時一般国民の思を一にす

るところであって、文久3年(1863)開成所と改名した洋書調所においては、蘭・英・仏・独・露各国語のほか、兵・医・天文・地理・物理・化学・数学から物産学・精錬学・器械学・画学・活字術等も講ぜられ、さらに万国史から西洋の法律・経済・哲学の攻究にも及び、慶応元年ロシアに派遣された6名の留学生を送る蘭・英・独・仏各国語の送別文のうち、当時15歳の黒沢孫四郎(祐之)の英文にも――

I hope, in your visit to Russia, you shall try to surpass the very Russians in politic and tactic, rather than in a mere knowledge of immense number of Russian words. (望むらくは、君ロシアにおもむいて当のロシア人を政治学及び兵学において凌駕せんと努められんことを、単に莫大の数のロシア語を学ばんよりは)

と言い、ロシア人に対し『学問の勝利』をおさめて帰朝のあかつきは、治国・外交に秀でんとする『わが大志を充したまわれよ』と結んでいるのを見ても察せられる。

『天は人の上に人を造らず人の下に人を造らず』と『学問のすすめ』の冒頭に宣言し、『独立自尊』を生涯の旗印とした福沢は、明治期第一の自由主義者として、緒方塾時代の『西洋日進の書を読むことは日本国中の人にできないことだ、自分たちの仲間に限ってこんなことができる。貧乏をしても難渋をしても、粗衣粗食、一見みるかげもない貧書生でありながら、知力思想の活潑高尚なることは王侯貴人も眼下に見くらすという気位』を一貫し『文明開化』思想の急先鋒で、今風に言えば『脱漢学・脱儒教』—当時の言葉で『脱亜入欧』—の親玉のような偶像破壊者的の一面もあるが、それは『中津藩の小士族で他人に侮辱軽蔑されたその不平不愉快は骨に徹して忘れられない』反骨からであって、福沢の本心は『福翁自伝』に『打ち明けて懺悔』してある通り、『維新前後、無茶苦茶の形勢を見て、とてもこの有様では国の独立はむつかしい、他年一日外国人からいかなる侮辱を被るかもしれぬ、さればとて今日全国中の東西南北いづれを見てもともに談るべき人はない、自分はなんとかしてその禍を避けるとするも、行く先の永い子供はかわいそうだ、一命にかけても外国人の奴

隷にはしたくない』という一念から発したものであって、それは彼の『文明論の概略』に見るがごとく、『欧人の触るところはあたかも土地の生力を絶ち、草も木もその成長を遂ぐることを能はず、はなはだしきはその人種(ひとだね)を殲(つく)すにいたる』実状の認識の上に立ち、『今の外人の狡猾剽悍なるは公卿・幕吏の比にあらず、その智もって人を欺くべし、その弁もって人を誣(し)ゆべし、争ふに勇あり、闘ふに力あり、智弁勇力を兼備したる一種法外の華士族と言ふも可なり。万々一もこれが制御の下にいて束縛を蒙ることあらば、その残酷の密なることあたかも空気の流通を許さざるがごとくして、わが日本の人民はこれに窒息するに至る』べきことを恐れ、『西洋の文明を目的とする』ことも、『わが文明のもって彼に及ばざるを知り、文明の後るる者は先だつ者に制せらるるの理をも知る』が故であって、今の日本国人を文明に進むるは、この国の独立を保たんがためのみ。ゆえに、国の独立は目的なり、国民の文明はこの目的に達するの術なり』と説き、『自国独立』の四字を掲げて、結論の一章の眼目としたのである。

かくて、『この日本に洋学を盛んにして、どうでもして西洋流の文明富強国にしたいという熱心』から、『東洋の儒教主義と西洋の文明主義と比較してみるに、東洋になきものは、有形において数理学と、無形において独立心と、この二点である』と覚って、『いまの開国の時節に古く腐れた漢説が後進少年生の脳中にわだかまっては、とても西洋の文明は国に入ることができないと、あくまでも信じて疑はず』あらん限りの力を尽して『漢学を敵にし』てたたかったのが、福沢の真面目であり、その努力の成果は彼が『国権論』の跋に『余輩の生は数年にして、人心の変遷を想へばあたかも数世を経たるがごとし……かかる人心の変遷は数百年を経るもなおかつ能くすべからざるを常とす。わが日本においてはただわづかに十五年の星霜を費やすのみ。けだし世界古今その例なきものならん。今後の進歩変遷また想ひみるべし』と自ら記している通り、『富国強兵』の国策に大に貢献するところあり、近代国家としての新日本の出現はやがて世界を驚かすことともなるのである。

しかし、福沢の思想には、宗教と芸術とは全くらち外に置かれ、その英学も

J. S. Mill の政治・経済論, Herbert Spencer の社会学という, いわゆる『実学』に限られ, 功利主義思想の流れは世の風潮となって『立身出世』主義の蛹をつくることともなった。また, 彼の漢学は仁斉・徂徠流の古文辞学であって, 闇斎・素行の学統に涉らず, 王政復古の思想的・一大源流をなした国学の門流にも触れるところが無かった。それ故, 『維新の事は, 帝室の名義ありといえども, その実は二三の強藩が徳川に敵したるものよりほかならず』と観じ, 『今度の明治政府は古風一点張りの攘夷政府と思ひ込んでしまった』のであった。

2. 英学から英語・英文学へ

福沢の場合に見られるとおり, 明治初期の英学は, 語学そのものを目的とするものではなく, 英語をとおり, 英書を手段として, 西洋日進の文明の粹を尽してこれを摂取し活用し, 以て『富国強兵』の具となし, 『自国独立』の究極目的を遂げようとする『実学』を目指したものであった。こうした意味での語学の習得は, 今日においてもその必要は変わらず, それ故に明治以来の我国普通教育にあって必須の一科目とせられて来たのであるが, 福沢流の英語は主として英書の解読を眼目として, 必ずしも語学としての正確さにこだわらなかつたので, 世にこれを『変則英語』と称した。この変則英語に対して特に『正則英語』を標榜した正則英語学校(明治29年—1896—創立)の斎藤秀三郎(1866—1929)は, 実学としての英語から語学そのものを目的とする今日の英語学・英文学への脱皮の過程を代表するものと言えよう。

斎藤は明治7年9歳にして宮城英語学校に入学, 大学予備門を経て明治13年, 当時東京虎の門にあった工部大学校に進んで化学と造船学を学んだ。すなわち, 『経世の要, 当今の急務』たる実学を学んで『利用厚生之源を開かん事』を志したのである。ところが, 在学4年 James Main Dixon に師事する間に実学よりも語学そのものに興味を持つようになり, ついに工部大学校を中途退学してその一生を英語の研究と普及とに献げつくした。まさに『正則英語』の誕生であり, その研究業績は, *Practical English Grammar* 4巻, *Advanced English Lessons* 7巻, *Monographs on Prepositions* 13巻, *Studies in Radical*

English Verbs 8巻、及び *Idiomological English-Japanese Dictionary* (熟語本位英和中辞典)、*Vade-Mecum English-Japanese Dictionary* (携帯英和辞典)、*Saito's Japanese-English Dictionary* (和英大辞典) としてまとめられ、多数の初級・中級・上級を網羅一貫する独特の *Idiomology* (組織英語学) の教科書として天下に普及せられ、我国英学界に『齋藤時代』の一時期を劃した。それは日本人として英語を血とし肉として味識した一切を、整然たる組織に組み直して展開し、実地に英語を正しく活用する道を、すべての日本人に啓示したものであって、明治35年(1902)の日英同盟締結前後より明治の末年にかけて完成された。それは飽くまでも英語の実地活用を主眼としたものであった点、なお『実学』の面影をとどめていたのであって、英語をその史的展開の全体像においてとらえ、これに言語学的解明を与えようとする純学術的作業としての英語学は、明治39年(1906) John Lawrence の渡来を迎えてその門に学んだ市河三喜の『英文法研究』(大正10年—1921年刊行)の出現から始まると言われるのであるが、その市河も若き日には正則英語学校の門をくぐったことがあり、またその大学卒論の着想も齋藤の緻密なる英語前置詞研究にインスピレーションを汲むところがあったのである。

かくて、齋藤の門下には英語実用の各方面に幾多の人材を輩出せしめたのであるが、他面、彼には福沢が全くもち外に置いた宗教と芸術とに関する情熱があった。齋藤は少年時代押川方義の手によって洗礼を受け、『父永頼もその感化で入信し、熱心な信者となった』ほどの『熱心なキリスト教者であった』のであり、教壇に立っては Byron の詩、Dickens の小説、Emerson, Carlyle の論文を講じて終生倦むことを知らず、日本海海戦の捷報に接しては英文長詩 *The Battle of the Japan Sea* 1篇を草して祖国の光栄を讃え、明治天皇の崩御に際しては御製百数十首を英訳して *A Voice out of the Serene* (雲上の声) 1巻を編し奉悼の誠を表したのであった。

3. 新英学の提唱

本文『序』において見たとおり、現今の『英学』は英語学・英文学を一括す

る便宜語として用いられているのであって、これに『新』を加えても、それはやはりどこまでも英語学・英文学のらち内に限られた『新英学』なのである。しかし、これとはその内容・観点を異にした全くの『新英学』が昭和2年(1927)に、英語学・英文学のらち外から提唱された。

それは昭和2年5月28日呉の海軍鎮守府において河村幹雄(1886—1931)の行なった『日米不戦論』と題する講演においてであった。河村は明治44年(1911)東京大学理学部卒業後、九州大学工学部に地質学を教えたが、『教育のほか何物もなし』と信じてその一生の熱血をことごとくここに注ぎつくして、我国国民教育改革の一途にたたかいたおれた天成の教育者であった。大正末期から昭和期の初頭にかけて、内外の情勢緊迫して祖国の時事日に日に非、国運の興廃をわかつ重大時機の刻々と迫るを感じ、『君がよの安けかりせばかねてより身は花守となりけむものを』と維新の志士平野国臣の遺歌を唱えつつ東奔西走、我国国民精神覚醒のために席のあたたまる時がなかった。『日米不戦論』は、その命をかけた血の叫びの一滴なのである。

『日米は既に戦いつつあり』という現実認識に立って、この『既に衝突している両国の意志のたたかい』において『日が米と戦はずして勝つ』方途を説こうとする。『勝敗の決は国民精神にある』のに、わが『国民精神の萎靡』して振わぬ根因は、明治以来の我国学校教育の誤りにあることを指摘して、『病根の中心は全く国民の中堅たるべき者が国民精神を持っておらぬ、国民的自覚のないという点に極まる』と推断し、『国史・国文を軽んじ、外国の事物を有りがたがり、師たる己れの長者を悪み軽蔑する悪風ある学校に長年月を過す青年が親を悪み国家を呪ふがごとき非国民に育ち上るのは理の当然』であるとして、これを救う方策の第一に『日本の古典教育』を挙げるのである。『世界に国は数多くありますが、千年の時を経て、現在の民が古歌を誦詠して、其の当時の民と等しい感激を味ひ得る国は他にない』ことを『日本文化の極めて著しい特色』の一つとして挙げ、『教ふる者自身が古事記の神々英雄となり、太平記を講じて大小楠公となり、万葉を誦しては防人(さきもり)となり、史上歌中の人物を己れ自身を以て表現』すべきことを力説する。

次に『対米戦略第2方策』として、『私はひそかに新英学、新しい英学といふことを心に画いて居る』と言い、『自然科学やその応用技術を学ぶための旧時の英学ではなくして、新目的を有する英学』を提唱し、『新しい英学の任務とすべきものは、英語国民の伝統精神を観破し其の生活内情を時々刻々に直に知らうといふのが一つ、更に英米兩國を通じて世界を観るといふことが一つ、最後にこれを以て己を写す鏡とするといふことが一つ』と三つの目的を立て、世の有名人が如何に『西洋通の西洋知らず』であるかを一々実例を挙げて詳論し、一方、Lincoln や Lee, Royce 其の他を挙げて『新英学の任務——美点の摂取』を説くと共に、『米国教育の失敗』を指摘して『米国式悪風俗の侵入』こそ『戦はずして敗るるの因』であるとし、『現今我国に多いものは、外国文化の奴隷か、然らずんば自己一身の快樂の奴隷であることを慨して『アメリカを戦はずして屈服せしめるには、第一に我日本の真価を覚ること。次に外国人の中で最も眼のある人間が我日本には敵はぬと言って居る、それ程優秀な文化を吾々が持って居るのであるから、この事に気がついて、世界のためにこれを保存発達せしめなければならぬといふ自覚を国民に起さしむること。この二つのことを是非やらねばならぬ』とし、村垣淡路守の『遣米使日記』及び西郷南洲の語を引いて『汽車、汽船、器具、機械の道具立が如何に多くても、仁なく義なきものは文明国とは言はれない。この道理が判然と悟れた時、吾々は戦はずしてもはや勝って居る。維新当時の我先輩に上述の如き卓抜なる識見と大盤石の如き確信があったればこそ、僅々五十年にして全世界に英・米二国の外、我に対抗し得る国の無いまでに国威を伸張することができたのである』ことを顧りみ、『この識見と確信とは、古典の体得と新英学の学習とによって与へらるるものと信ずる』と結論している。

この河村の『新英学』論の精神は、明治初期における福沢が、その『通俗国権論』に『西洋心酔の輩』を批評して、『文明開化の一説世に行なはれてより、ほとんど天下普通の名号となり、一も西洋、二も西洋とて、ただ一方に進みてとどまることを知らざるその有様は、舟に帆を揚げて錨の用意なきがごとし。その進行の際にはただ変化をもって文明と認め、旧を棄つるを開化と思ひ、は

なはだしきは髻をのぼして巻煙草をふかし、もって文明開化の徴となすに至れり』と言い、『余輩の考へは全く心酔者流に異にして、ただに我国の一新西洋国たらざるを憤らざるのみならず、そのあるひは西洋国たらんことを憂ふるものなり』と述べ、『すでに固有の文明あり、なんぞことさらにこれを棄つることをせんや。固有の智力をもつて固有の事を行なひ、兼ねて西洋の事物を採りてもつてわが固有のものとなし、棄つるはきわめて少なからんを欲し、採るはきわめて多からんを欲す。事物ますます繁多を致して智力ますます活動を逞しうし、小は人生一身の本分を達し、大は独立一国の権を興張せんこと、余輩のつねに願ふところなり』と宣言している批判摂取の精神に通ずるものがあり、それは明治のみかどの『国』と題する御製『よきをとりあしきをすてて外国におとらぬ国となすよしもがな』に総合せられる明治期の外国文化摂取融合の根本態度であった。河村はこの明治期を導いた維新先覚の識見と確信に返らむことを説いたのである。

4. む す び

幕末、黒船の来航に一世騒然たる時、『すましえぬ水にわが身は沈むともにごしはせじなよろづ国民』の御製を拜して全国一斉に奮起した志士の一人、吉田松陰は『六十余州一塊石の心』の実現のために『天朝の御学風』を天下に明かにすべきを説いた。弘化4年(1847)仁孝天皇の聖旨によって開かれ、孝明天皇より勅額を賜った『学習院』の学則には『聖人の至道を履み、皇国の懿風を崇ぶ。聖經を読まずんば、何を以て身を修めむ。国典に通ぜずんば、何を以て正を養はむ。明かにこれを弁じ、篤くこれを行なへ』と、古来皇室の御学問の伝統を要約してある。また当時一般に学問の指標として行なわれた『和魂漢才』の語の出所とされる『菅家遺誡』中の二章『凡そ神国一世無窮の玄妙は、敢えて窺知すべからず。漢土三代周孔の聖經を学すといえども、革命の国風、深く思慮を加ふべし。凡そ国学の要する所、論古今に涉り、天人を究めむと欲すといへども、其の和魂に非ざるよりは、漢才も能く其の闡奥をうかがふこと能はず』も、この学習院学則と表裏をなすものであり、その学問的註解は、院

の雑掌、紀維貞の『国基』の著に見られるが、ここにはまだ英学を含めた洋学には触れられて居らぬ。

では、明治期に入って、この『天朝の御学風』は如何に展開せられて行ったであろうか。それは王政維新の主軸をなした明治新政府の首脳、三条・岩倉・大久保・木戸、更にはこれを継承した伊藤博文・山県有朋等によって、明治期の文教を含む国家体制そのものの中に具現されて行ったと見るべきであって、維新宏謨の策定に当っては『神武復古』の説を抱いて岩倉の隠れたる謀士となった偉丈夫、玉松操あり、明治の近代国家体制の創定に際しては伊藤の脳髓として『その满腔熱血を濺ぎ』つくした純忠無二の人物、井上毅(1844—1895)があった。

井上毅は、少年時、特に選ばれて熊本の藩学・時習館に学ばしめられた俊才であって、江戸留学中は、フランス語を通して西欧の文物を学ぶと共に、安井息軒の門に入って漢学を修めたが、明治4年(1871)岩倉・大久保等の遣欧使節団に従い親しく西欧各国の政情・制度を踏査し、パリにあっては Sorbonne 大学に Gustave Boissonade の講筵に列して西欧法制の理論と實際を究めた。始め岩倉・大久保を助け『枢機の事務ほとんど与からざるなく』、二老没後は伊藤・山県を助けて『戊辰以来の大業を成就』せしむるに『必死を期して』奮闘した。彼の思想の一斑は、その著『梧陰存稿』(明治28年—1895—刊)所収の各篇、特に『五倫と生理との関係』『言霊』『人に自尊自卑の性ある説』等の諸篇に見られるが、『総て倫理の関係は生理に於ける人身の組織構造に基かざるはなし』と言い、『古き詞は古の風気意想をさながらに後の世に伝へて』と言い、『此は皆人性自己の欠点を感じざるの靈覚より生じ、人世永遠の標準により観察すれば此れも社会進歩の一の駅路にして』と言い、或いは『人は団結動物なり』の西哲の言を引き、『到る処の村落に一の尊長あらざるはなき』探險家の筆記を挙げ、東西の古言と古今の史実とを対比論断するところ、すこぶる科学的・実証的であり、文献・文化史の見地を示し、江戸時代の『聖教要録』から『中朝事實』『武家事紀』『謫居童問』に及ぶ和漢一切の典籍を網羅する山鹿素行の博綜的『実学』近代西欧の碩学 Wilhelm Wundt の『生理的心理学』から『哲学体系』

『倫理学』『民族心理学』に亘る、人類文化の全領域に心理学的解明を与えようとする実験的・歴史哲学的総合精神にも通うところあるを思わしめられる。

現代の百科事典的知識では、彼は『官僚政治家』の名で片付けられているが、上智大学の『日本文化誌叢』の編集者 Joseph Pittau氏は流石にその思想に着目して、その *Inoue Kowashi and the Formation of Modern Japan* (*Monumenta Nipponica*, vol. xx, no. 3—4) で彼を a great thinker と呼び、明治の日本の近代的国家形成に際し、軍事・法制・教育の各方面に果した彼の至要の役割を論じている。彼の思想が如何に国際国民的生活の活きた現勢に密着していたかの一例は、彼が明治23年3月起草した『山県有朋軍備意見』の稿本を見てもわかろう。その一節に

『国の強弱は国民忠愛の風氣、之が元質たらずんばならず。国民父母の国を愛恋し、死を以て自ら守るの念なかりせば、公私の法律ありと雖も、国以て一日も自ら存すること能はざるべし。国民愛国の念は、独り教育のみ以て之を養成保持することを得べし。欧州各国を觀るに、皆普通教育に依り、臣民の知能發育の初期に当り、其の國語と其の國の歴史と、及び他の教科の方法に従ひ、愛国の念を薰陶し、油然として發生し以て第二の天性となさしむ。父子相伝へ、隣々相感化し、一國を挙げて、党派の異同・各個の利益の消長あるに拘らず、其の國の獨立・國旗の光榮を以て共同の目的とするの一大主義に至りては、総て皆歸一の點に注射湊合せずんばならず。國の國たるは唯此の一大元質あるに依るのみ。其の事、固より一朝空言の能くすべきに非ず。必ずや將來二十年を期し、寸を積み尺を累ね以て成績を見るの地に達せざるべからず。而して此の二十年間は即ち吾人胆を嘗め薪に坐すの日なり』

と言っているごとき、吉田松陰の『六十余州一塊石の心』にも通じ、河村幹雄の『國民精神をもって國民精神を守る』の論に一貫した『國を思ふ』熱き誠の、やむにやまれぬ精魄奔騰のひびきを伝える。彼が『軍人勅諭』『帝國憲法』『教育勅語』という明治精神の三大支柱の成立に当り『字々句々滿腔の熱血を濺ぎ』つくしたことは、明治聖代のかがやきと共に永く後の世の人々の心に刻まるべきである。

その『帝国憲法』の起草に『英学』方面から参画して井上に協力した者に金子堅太郎(1853-1942)がある。金子は明治5年より11年まで米国に留学、小学・中学を経て Harvard 大学の法科に進み、渡米前に福岡の修猷館で学んだ漢学の素養により一般米人学生を凌ぐ論文を常に書く英語力を示した。明治12年東京に出て大学予備門に入学した斎藤秀三郎が、当時予備門の教師の一人であった金子の自由な本格的な英語に感嘆して、『今はあれ程の修業を英語に積む人は居らぬ』と評したほどの達人となっていたが、政治思想方面においては、イギリスの Edmund Burke の著作を択ぶ見識を養っていた。

Burke はイギリス近代保主義の父祖と仰がれ、Cromwell の Great Rebellion 当時の王党派の流れを汲み、Bolingbroke の *The Idea of a Patriot King* から Benjamin Disraeli を経て今日の Winston Churchill に及ぶイギリス Tory 派の伝統の思想的中心であり、フランス革命の惨劇を眼前にして火山の爆発のごとき憤激の情意をこめて執筆したその主著 *Reflections on the Revolution in France* は、イギリス本来の Spirit of Freedom に則って保守改革の理念を表明し、社会秩序の擁護を唱え、人間社会の道徳的・宗教的基盤を強調した『保守主義の聖典』『保守的一切理念の宝庫』であった。

かくて、明治の民は『億兆一心』の実を挙げ、国運を賭した2度の大战もたたかい抜いて、『万民こころあはせて守るなる国にたつ身ぞ嬉しかりける』『久方のあめにのぼれるここちしていすずの宮にまゐるけふかな』の御製をも仰ぎ得たのであるが、官学の中枢たる東京大学は、元田永孚の『聖諭記』に見られるごとく、早くより『西洋の外を慕倣し、曾て国体君臣の大義仁義道徳の要を聞知せざる者共』の集団と化し、学界・思想界は偏々に『新』を追うて欧米『革命の国風』になびいて、『天朝の御学風』を天下に明かにする思想的撥乱反正の理想は実現せられぬままに、大東亜戦敗衄の因とも果ともなって今日の亡状を呈するに到っている。『序』に触れた如く、我国洋学は、英学をも含めて、その在り方を根本から問直されねばならぬ時となっているのである。